

令和3年度 第2回白馬高等学校学校運営協議会 議事録（概要）

- 1 日時 令和3年（2021年）11月8日（月）9時30分～11時30分
- 2 場所 白馬高等学校会議室
- 3 参加者 委員9名（武田彰代氏欠席）
この他、長野県教育委員会より2名
（高校再編推進室主幹指導主事：上原一善氏）
（同 主任指導主事：佐野浩一郎氏）
白馬・小谷両村関係者7名
白馬高等学校職員4名



4 次第

- (1) 開会の言葉（井出敦白馬高校教頭）
- (2) 長野県教育委員会挨拶（上原高校再編推進室主幹指導主事）
- (3) 学校長挨拶（関正浩白馬高校長）
- (4) 報告事項

① 学校現況報告（関校長）～配布資料に基づき説明

<関校長>

- まず、生徒募集活動について。8月、9月の体験入学・説明会は中止とせざるを得なかったが、例年と同じ申込数があった。10月の説明会には27人、授業公開には13人の中学生が参加した。地元中学校の先生方と保護者に対する説明と意見交換の機会が必要だと考えている。
- 前回指摘のあった、白馬中学校長の出席については必要ありと考えるが、定数上の規約があり、今年のところはオブザーバー参加ということでお願いしたい。
- 続いて教育活動について。グローバル講演会は、地元で活躍する福島のり子さんをお願いした。ロールモデルに触れる機会として生徒に大きな刺激となった。生徒には、地域における新しい価値、新しい働き方や経営、新しいリーダーシップのあり方などを学んでほしい。
- 今年も現時点で長野県立大のグローバルマネジメント学部で1名合格している。本校での学びを土台に大学で学びたいという生徒が今後も増えていくように、学力面でもしっかりサポートしたい。来年度から国学院大学に観光まちづくり学部が新設される。先日、大学を訪問し情報交換する機会を得たが、本校の学びと重なる部分も多く、今後高大連携が考えられそうだ。
- 地域での働き方を知りキャリアデザインにつなげるデュアル実習に3年生6人が参加した。
- 8月に3年生女子2人が、岩岳で地域を元気にする音楽フェスを企画運営した。NHK ニュースやEテレでも取り上げられた。12月のマイプロジェクトでの発表を準備中である。
- 今後の予定としては、今月25、26日に2年ぶりとなる高校生ホテルを実施する。12月の白馬フォーラムでは、これを含めて生徒の活動実践発表を行う。ニュージーランド語学研修の代替として、1月に福島県にあるブリティッシュヒルズでの語学研修を計画している。
- 学校で様々な教育活動を行うが、最終的には、生徒にどんな力がついたのか、生徒にどんな育ちが見られたのか、満足した高校生活を送れたのかといった評価の部分が重要となる。
- 中間的な評価として、9月に実施した「高校魅力化評価システム」調査の結果をみると、主体性の面で「うまくいかないことに意欲的に取り組むことができる」とする生徒は多いが、自己有用感を持つ割合はやや低い。社会性の面で「地域の役に立ちたい」は約7割。地域とのかかわり方を工夫して、地域についての理解を深めることで地域貢献の意欲をさらに高めたい。総合的な満足度は全体で8割以上ありおおむねよいと考えるが、生徒個々の状況もしっかり分析したい。

質疑・応答

<岸委員>

- R4年から国際観光科でも理系大学を目指せると聞いたが、カリキュラムの内容を知りたい。

< 関校長 >

○資料にカリキュラム表を載せている。2, 3年では普通科と同様に多様な生徒のニーズに合わせて選択できるように改善した。特に理科において基礎でない物理、化学、生物、地学を履修できるようにした。

② 白馬高校支援係より報告～配布資料を説明

< 松澤事務局長 >

○寮関連では地域清掃ボランティアに2回参加、塾関連では特進クラスに4人(うち地元生は1人)が所属し、一般クラスと合わせ全員で31人が通塾している。

○「白馬高校を育てる懇話会」は今年度もコロナのため、資料配布のみとなった。

○「地域みらい留学」(一財地域・教育魅力化プラットフォーム)のオンライン合同説明会に参画し、学校側は「特徴的な学び」、支援係は「住まいの環境」を説明。それぞれ77人、123人の出席があり、他校に比べ多かった。

○地元生徒が少ないとの指摘があり、同窓会と協議し「白馬高校で自分の可能性を見つけよう！」のチラシや公営塾の特進クラス開設をアピールするチラシを作った。またPR動画作成を検討している。

< 丸山事務局長 >

○寮生の保護者のアンケートをとったところ、寮生活についてはおおむね満足しているという声を得られた。食事の改善を求める声があり、関係者と継続して協議をしているところである。

質疑・応答

< 岸委員 >

○寮の食事について、どのような問題があり、どのように改善を図るのか?

< 丸山事務局長 >

○スキー部生徒が多く、量が足りないという意見がある。また単純に美味しくないという厳しい意見もある。朝夕はともかく特に昼の弁当が生徒によっては量の過不足に不満の意見がありバランスが難しい。その辺りをどう改善するかが課題。

< 岸委員 >

○食べる順番によって後の人が足りないということはないか?

< 松澤事務局長 >

○そのようなことはない。今、リクエスト弁当という取り組みもやっている。

< 白戸議長 >

○他にご意見、ご質問が無いようなので、続いて生徒のみなさんの発表に移る。

(5) 生徒発表

1年生6人が自己紹介、発表。

内容:最近では雪が少ないが将来どうなるかと考えた時、白馬には自然を活かした活動をしている人が多いことに気づいた。授業でビジョンアトリエワークショップをしたのがきっかけで、グリーンワーク HAKUBA に参加し、今後の地域観光を考える人たちと知り合う。最初はYouTubeで白馬の魅力を発信することを考えたが、持続的にできることは何かと考えるようになった。そこで毎週金曜放課後にノルウェービレッジで勉強会をしたり、「地域と暮らしのゼロカーボン」や大学生とのワークショップに参加したりした。感じたことは、関わった方皆さんが「白馬が大好きだ」ということだった。

< 浅井教諭 >

○従前の生徒の取り組みと異なる。これまではあるプロジェクトをやってこうなりましたという発表だったが、彼女らは、まだやることが見つからないが地域に出て学びを深めている。その中で特徴的なのは「地域の人たちが関心興味を引き出してくれること」「互いに学び、知ることができること」「対話をして一緒に考えること」だ。観光に携わる福島さんも相手に刺さるPRメッセージを考えるうえで10代の若者を知ることができるし、それによってやり方を変えることを学ばれた。私も授業を変えなければと思うようになった。

○(発表した生徒6人に対して)君たちは今の授業をどう思う?

<生徒A>

○学校に閉じこもっているだけでは、これから必要な「他人と共有したり、発表する力」が身につかない。フィールドワークやディスカッションをもっと取り入れてほしい。

<生徒B>

○先生の話聞くだけでは入ってこない。対話が増え自分の意見をもっと出すことによって、インプットにつながると思う。

<生徒C>

○県外から白馬に来た人が大きな仕事をしている。白馬に元からいる人は白馬の魅力の凄さに気づいていないのではないかな。

<浅井教諭>

○この生徒たちは、放課後勉強会などで大人たちの相対性理論や宇宙論の難しい話でもしっかりと聞いている。ところが私の観光の授業では同じようにはいかない。聞けるときと聞けないときとどう違うのか。「地域で」「少人数で」なおかつ「興味のある人と」やると、今までと違う大人との関わり方が見える。毎年違うタイプの生徒が入学してくる。学校は毎年バージョンアップしているのにどこかミスマッチ。長いこと関わっていると過去の蓄積がかえって邪魔になることがある。何かやりたいという生徒が増えてきた。教師は生徒の伴走をし、授業と連動させていかなければならない。自分の意見を発信できる生徒が増えてきたのが何より嬉しい。

意見・感想

<岸委員>

○驚きました。1年生とは思えない。先生が一步引いている所で自己表現が出来ているようだ。私の会社では完全無農薬でイチゴのリレーショ栽培に取り組んでいる。国際観光科の理系に期待している。

<相沢委員>

○発表された6人は1年生なのに自分の意見を持っていて感動した。私もSDGsの観点から自然栽培に取り組んでいる。温暖化への取り組みは、一人ひとりの気持ちが大切。みなさん方も取り組んで欲しい。

<伊藤委員>

○これからの学びというのはこうあるべきだと思う。地域には課題が山積しているのだから、それを行政からたくさん出してもらって興味のあるテーマを選び自分なりの仮説を立てて考えるといい。

<白戸議長>

○凄いですね。地域には迷惑をかけていいので、どんどんチャレンジしたらいい。ここから先は自らが知識を深めたいと思うことが大事。そうすれば、座学とアクティブラーニングがうまく積み上がっていく。

(6) 協議

①今後の白馬高校の学校運営について

<白戸議長>

○国際観光科が開設され6年経った。この間、コロナ感染症をはじめ社会情勢の変化、学校をとりまく環境の変化等々があった。いろんな取り組みがなされ様々な成果を収めているが、ここからは将来について考えていかなければならない。今後白馬高校の運営をどう考えていけばいいのか、今まで継続してきたことをどう今後につなげていくのか、様々な課題をクリアして地域として白馬高校をどう維持していくのか、それぞれのお立場で考えられること、できること、あるいは要望などについてお話ししていただきたい。最初に学校側から問題提起をしてもらう。

<関校長>

○本校は、地域の豊かな教育資源を活用した魅力的な学びを提供して生徒の満足度を高め、より良い地域づくりに貢献する高校として今後も教育活動を継続していきたいと考えている。しかしながら、本校を取り巻く環境は厳しく、学校だけの努力では立ち行かない面が多々ある。最大の不安要因は生徒数の減少だ。

○平成29年に564人だった旧12通学区の中学卒業生数は、令和3年にはその8割の448人となり、令和10年には400人を割る予測となっている。そうした状況で地域の子どもを地域で育てるためには様々な工夫と決断が必要だ。委員の皆様のお考えをお聞かせいただきたい。

○学校として今後取り組むことを資料15ページ以降に挙げた。今強調されている探究的な学びこそ、

本校が得意とするところである。ペットボトルをやめてマイボトルにすればいいとの単純な発想から出発した生徒も、複雑な関係性に気づいてより深く物事を考えるようになった。

- 持続可能とはどういうことか、新科目「北アルプス学」や環境、その他の理系科目で科学的な背景を持たせながらしっかりとした学びを展開したい。そのためにも地域の協力が必要だ。
- 地域に出ることで生徒が育つ。日常的、継続的な取り組みとなるように、地域とのかかわり方を工夫していきたい。
- 多様な特性や背景を抱えて入学する生徒も増えており手厚い支援が必要。生徒たちが将来、自由な人生を送るために、自分の頭で考え自分の言葉で語るための最低限の知識とその使い方を身につけさせたい。地域の方々の協力は不可欠であり、一層のご支援をお願いしたい。

②意見、提案

<白戸議長>

- 生徒は生き生きと学んでおり、しかも地域とも絡んできている。地域は学校に何を求めるか、学校の在り方・地域の関わり方を長期的な視点で考えることが必要。今日はきっかけとして委員の皆さんがどんなことを考えておられるのかを自由にお話してください。

<岸委員>

- よりよい地域づくりに貢献できる学校づくりということで、国際観光科のカリキュラムに自然科学や農業（農政）を、またスポーツ（観光）関連で、医療までは難しいが、人体工学、栄養学などが入れば、心身の癒し、メンタル的なことも学べ、進路に幅が出るのではと思う。

<相沢委員>

- 白馬の魅力が地元では気づいていないという1年生の発言があったが、白馬高ではこんな活動をしているということを具体的に子どもたちの動画などを使って地元でPRしたらよいのでは。特に母親に響く形でできないか。

<伊藤委員>

- 学校評価システムによると生徒の「自己肯定感が低い」一方「自分とは異なる意見を尊重できる」は高いとあるので、もっと一人一人に光をあててやる必要がある。いつも同じ子だけに光があたるのは発信が上手くできていないのかもしれない。トランポリンで活躍する生徒のことは学校へ来て初めて知った。大切なのは本人たちが発信すること。白馬の魅力の発信には何々があるからではなく、「住んでいて楽しい」「通って楽しい」という自分がどう感じているかが大事。

<平田委員>

- しろま祭で生徒発信のInstagramが楽しかった。一方、学校のHPの部活の部分は長く更新されていない。インスタとリンクさせて生徒たちに発信させてはどうか。中学時代から答えだけでなく答えを出す過程が重視されディスカッションも増えてきた結果、発表した生徒たちが育ってきたのではないか。白馬の魅力は押し付けでなく、生徒が自ら発見する機会をどのように与えるかということが大事なのではないか。

- 保護者向けのチラシについては、反応はどうだったか？

<松澤事務局長>

- チラシは小中学校の保護者に向けてこれから配布する。

<白戸議長>

- 「学びをどう深めるか」「情報発信をどうするか」について提言が出されているが、先ほどの校長の発言にあった「学校の努力だけでは」という点について、もう少し聞かせて欲しい。

<関校長>

- 現在県では再編計画が進んでおり、白馬高校も80名募集だがなかなか集まらない現状がある。中学卒業生数は減っていくが、地域の学校として、これまで積み上げてきたものをどういう形で維持していくのが望ましいかを、この協議会で議論したい。かつて国際観光科を立ち上げなければならなかった時の状況に再び直面している。

<白戸議長>

- では、その辺りも視点にいれて議論を続けていただきたい。

<出口委員>

- 小谷中の多くの生徒が白馬高校を希望している。大きかったのは8月のスカイフェスでの吹奏楽部とのコラボで、こんな高校生になりたいという気持ちを持った。地域との交流は大人だけでなく、中学生とも是非交流して欲しい。

○地域に出かけることが学びにつながるという話があったが、地域の人に学校に来てもらうことも大事。どれだけ多くの機会を作るか。高校の専門の先生によるシニア大学や生徒の企画で今日のような発表を見てもらうとか。小さくても学校は地域のコミュニティの中核である。

○白馬高校の「多様性を包み込む学校運営が課題」だという話は中学校でも同じだ。

<中村委員>

○プロジェクト学習部の発表に感心した。2年、3年と積み上げて目指させるビジョンは学校が決めているのか？

<関校長>

○終着地は決めていない。学校は生徒のプロジェクトを手助けする立場。生徒の気づきや思いを大切に考えている。

<中村委員>

○その手法で良いと思う。プロジェクト学習部の学年それぞれが、中学校に来て発表して欲しい。そこに保護者や小学生が参加してもよい。

○運営協議会としてもビジョンを明確にしてこんな形で育てていくと明らかにすべき。「せっかく白馬にいますので（教室の）外に出たい」との発言は、白馬に魅力を持っていることが分かる。

○インバウンドが戻って来たら、インバウンドの人たちの考え方や行動様式を、またそれぞれの国ごとの違いなど、カリキュラムでは難しくともプロジェクトで学ばせるとよい。

<下川委員>

○「白馬の良さを知らない」という発言があったが、それは観光の衰退や白馬高生徒数の減少と関わっている。2019年に非常事態宣言を行ったがそれには白馬高生の存在が大きかった。ゼロカーボン運動など村民一体となった行動が必要となるが、SDGsや山岳景観の素晴らしさを国内外にPRしていくためにも白馬高生の協力をお願いしたい。白馬高校の良さを村民・OB・PTAにPRしなければならないことを改めて認識した。

<白戸議長>

○中村委員の発言にもあったが、この協議会でもビジョンをしっかりと検討しなければならない。白馬小谷両村の持っている課題と高校生の課題をつなげていくことが必要で、外から入って来た人と行政をつなぐ働きを高校生がしている。大学では、信州学から始まって高校までに学び体験してきた生徒が今や入学してくるようになってきた。大学でも成果が出るまで10年かかったが、校長発言にあったように人口減に10年は待ってられないところまで来ており、我々も動き出さなければならない。この議論は次回以降につなげたい。

(7) その他

<伊藤委員>

○地域が一番困っているのは限界集落問題だ。そこにこそ「良い文化」というお宝が残っている。それを見直し誇りを持てるよう学ぶ機会が必要。次の世代に残していくものは何かということ子どもたちと一緒に考えて行く場にしてほしい。

<岸委員>

○地域の未来を考えるということで、外からの目と地元からの目という観点から実務的なことを発言したい。世界企業としてのパタゴニアさんから生徒向けの講義をしてもらっているが、新潟に本社のあるスノーピークさんにも異なる視点で話をしてもらえば、新しい気づきがあるはず。

(8) 閉会の挨拶（井出教頭）

○ありがとうございました。次回第3回協議会は2月14日（月）を予定している。